立たされちゃったよ」「ふざけんじゃねえよ。学校はおまえら教えるところだもんな。そんなこと（ごめんなさいね。だんだん口調が移っちゃって）俺、かけ合ってやるよ。おまえ、ちゃんと中に入って教えてもらえ。学校は教えてもらうとこじゃねえか。おまえ立たされて、そんな、月謝払ってんだろう。俺、かけ合ってやるから来い、来い」っていって「何だよ、おまえ廊下に立たせて何だよ、俺ならいいけどよ、こんなガキ立たすことないだろ」っと、先生とやるわけです。それでもうすっかり、先輩ってカッコウいいなあ。本当に俺のことわかってくれるかもしんないっていう想いでね。ああいう先輩に俺もなりたい。カッコウから何から全部変えていくわけですね。

大人になるということ

ちょっと時間がないのではしょりますけど、いくつかの例は除きますけど、これですね。そっくりそのまま、日本の昔の成人式のしきたりですね、そっくり当てはまっていくんです。

なぜかといいますと、昔は子ども組といって、子どもたちだけで自主組織がありました。これ、もっとウーンと研究しなけりゃいけないと思いますけど。それから若者宿というのがありまして、若者たちだけが集まっていろんな訓練をしていく。そして一丁前になったということで、おとなの仲間入りをしていくわけですね。今の場合だと、若衆宿の年齢ですが、若衆宿、若者宿、にせこ宿というもののなかで一番大事にされた、つまり子どもからおとなになるために一番大事なものは何かというふうに上げるとですね、いろんなものがあるんですけど、三つに絞り込むことができるといわれています。

ひとつは、あっ、さっきの話でちょっと抜かしたのは「俺、学校なんかどうでもいいから、仕事したいよ」と言ったんです。「もう仕事バリバリやりてえなあ。こんな学校でもってノロノロしてるんだったら、俺はもう仕事早くやりたいよォ。金も取れるし、俺だって余っちゃってるよ、力。何だっていいや、仕事してえよ。だけど中学卒業するまでは仕事しちゃいけないって、学校で言うんだ」こういうことですね。ごめんなさい、抜かしました。

まず第一は、仕事が一丁前になるということです。労働が一丁前に出来るということです。だから、若衆宿のなかで先輩から徹底的にしごかれるわけです。ある程度家が作ることができる。家のまた家具が壊れたから修理することができる、あるいは畑作業ができる。

とにかく労働が一丁前にできるということが、おとなになるまず第一の条件です。このために若衆宿というのは、一年、二年、三年くらいの間そこに通って、おとなになるための訓練を地域でしたわけです。その地域、地域によって、漁業のところもあるし、農業のところもあるし、林業もありますからね、さまざまですけど、そういうふうな訓練をしたわけですね。

第二番目。性的に一丁前になるということです。これは、中学生。あとの話をぬかしちゃったんで、話が前後しますが、女の子とたくさんつき合って、不純異性交遊というふうなことで、たくさん指導されていますが、当然女の子たちに関心をもつようになりますし男の子たちとの関係をつくりたいということになるんですが、しかしどうしていいかということがわかりません。この若衆宿のなかで、男の子は一丁前になったというと、フンドシを卒業すると送られたんです。女の子は腰巻きを送られたんです。その色を想い出して下さい。どちらも赤です。これは血の色なんです。これは正確にそうだったかどうかということは、まだはっきり僕も言えませんけど、中山太郎さんという民俗学者が書かれた「日本若者史」という本の中に、フンドシが成人式の卒業のひとつの免状として渡された。

そのフンドシは必ず血茶けた血の色で染まっていた。それが現在の赤フンドシに変っている。割礼(かつれい)があったといいます。あるいは実際に性行為を指導されたといいます。

そんなこと、十三や十四でそんなことっていうことですが、いろいろな文献を調べていくと出てくるんですね。そして、その地域の中で、これは全くの秘密にされていますけども、年のいった女の方がですね、その子たちにていねいに指導します。そして、性的に一人前になる。そして、どんなにそれが大事なものであるか、どんなに厳しいものであるかということを、文字どおりからだで教えるわけですね。そして、その子たちはドキドキしながら、その日、それは自分をおとなにしてくれた人ですね。多くはその地域の旦那さんを亡くされた未亡人の方がなったというふうに記録ではありますけども、そうです。

女の子の場合も、これは男の人じゃなくて、女の人の先輩がですね、どうしたらいいかということで教えます。そして、真赤な腰巻きが送られます。これが成人したということの第二です。

この性的なことを教えるのに、何ときれいごとで学校で教えてるでしょうか。親たちもしゃべれないでしょうか。これは、実際の自分の親ではなかなか言えないですけども、地

域のその先輩たちが教えるということなら、できるわけですね。

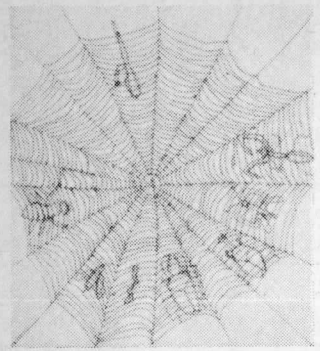
三つ目。つき合い方です。ひとつの集落を形成していくために、どういうつき合い方をしたらいいのか。とくに、若い人間は年寄りとどうつき合えばいいのかということが、徹底的に教えられたそうです。それから、異性とつき合う方法。そして小さな子どもたちをどうしたらいいのか。現在でいえばですね、からだに障害をもった人たちとどうつき合えばいいのかというふうなことも含まれると思いますけど、そういうふうなことが徹底的にその若衆宿のなかで鍛えられて、そして子どもが一丁前になっていく。おとなになったそれは年齢に制限ないそうです。ある人は早くに、十五歳でもって一人前のおとなに仲間になっていく。だから結婚式っていうのはほんの形式的なもので、成人式の方が重大な一丁前に俺はなれたかどうかということが、非常に重要な意味になっていたということですね。そういうことなんです。

心の空洞をうめるために

今の子どもたちは、そういうものがみんな剝ぎとられていますから、今子どもたちが陥

いってる状況全部言いますとね、全部そこなんです。

たとえば、メチャクチャに食べる。あるいは、メチャクチャに全然食べないで、これは名前が病名についていますけど、やせ症という病名がついていますが、精神科のお医者さんにいわすと、あるいは盗みをする。これはですね、自分のなかに本来友だち同士の間であるいは上の人たち、先輩の人たちからきっちり伝えられるものがないんです。無いから友だち同士の栄養源もとれないから、つまり友だち同士の関係ができないで、ハジキ出されちゃったから、つまり学校のなかでも勉強ができないということで、面白くないということで出されちゃうし、友だちも、本当の意味の友だちもなかなかできてこないということで、ハジキ出された。その空洞がありますね。空洞を埋めるために。おなかが空いてるんじゃないんです。腹一杯になってても食べるんです。埋めたいんです。口まで一杯につまって



いても、もっと食べたいんです。なんか、どっかスキ間だらけでしようがないんです。

女の子でも靴をたくさん盗みます。男の子でも食べもしないのに、即席ラーメンとか、もっといいもの盗めばいいのに、そういうものいっぱい、押し入れの中、即席ラーメンだらけ、いっぱい入れます。持ってきます。それからゲームなんかも持ってきますね。それもね、欲しいからじゃないんです。ブーツが何十足揃ったって、もう使わないんです。とにかくどっかをいっぱいにしたいんです。そういう意識ですね。

それから最近女の子の方で、リースカットといいますか、自殺です。ここ切ります。カミソリで。たくさん出てきています。話を聞きますとね、自分が生きてるんだか、死んでるんだか、よくわからない。楽しいことが全然ないし、確かめようと思って。生きてるかどうか、血が出るかどうか確かめようと思った。で、切ります。血が出る、びっくりする、自殺しようとする、しかしその切り方が非常に浅いんですね。ほとんどの症状は。致命傷までいきません。だけど血がタラーッと落ちます。それですぐ注意されて、二度とそういうことするなよといいますがしばらくたつと、また自分でやります。自分を確かめたくてしようがないんだけど、確かめる方法がないんです。

それから暴力を振るいますね。学校でも。とにかく自分自身をぶっつけていって、それをきっちり返してもらいたい、というものを求めているのに、それが戻ってこないんです。そういうものの全部表われで、その他ほとんどの症状が全部そうなんです。登校拒否の場合でも、もっと三重の疎外になっちゃうんですね。友だちができなければ、友だちの力でなければ回復ができないのに、友だちから切れてしまってますから、ますます回復が弱まってしまう、というふうになってしまうわけですね。

いのちを伝える

それで、いま、僕自身の課題なんですが、こういう子どもたちが片一方にいます。それがもう全国で蔓延しています。そして片一方僕が知ったところでいえば、寿町のようなところで、自分の体験を熱烈に、もう夢中で語ってくれる人たちがあます。その言葉が通じません。聞いてくれません。聞いてくれる媒体がないのです。子どもたちは、戦争というものがどうだったかという生身に、戦争に行った人から聞いていません。おふくろと裂かれるようにして別れた人が、今、涙というものをどんなふうに考えてどんなふうに書いたのか

ということを伝えることができません。それをつなぎ合わさなければいけないと思います。

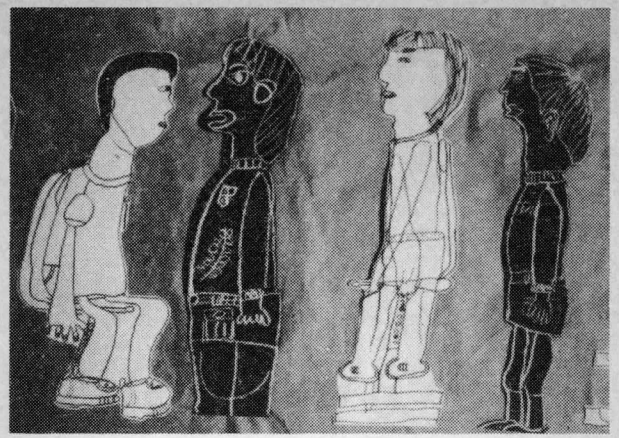
それがひとつの地域で、とくにこういうところであれば、お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんの生きてきたその姿がですね、子どもたちに伝えられないというはずは絶対にないと思います。こんなに身近かにいるんだから。切り離されては、まだいないんですから。それを、つまり自分の生きてきたいのちそのものを伝えていく、それはいのちが次の子どもたちのいのちに点火するかもしれないという可能性としてあるわけですね。

僕は、学校というものと、今たくさん関わっていて、学校の先生たちといろんな問題にぶつかっていますが、ほとんどは学校から切り離して、地域から切り離して、教護院とか少年院とか、施設にあの子が入ってくれたら学校は落ち着きます、といっていますけどもこれは、もうまったく反対の発想だと思います。まったく反対の発想で、むしろその子たちが本当に求めているのは、今いったような問題をうずめてほしいということですから、それをやっぱりうずめなければいけない。そのためには、学校が教師のためのものであってはならないと思うんです。だから、もし僕が教師であれば、教室に地域のお父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんに来てもらって話を直接聞くことができていい。

むしろ、教室を離れて、その人の家に行って話を聞くというのが授業であっていい。あるいはその中にあるいろんな産業、おそばやさんをやってる家もある。農業をやってる家もある。その家へみんなで行って、あるいはそれが見たいという子どもたちと一緒に行って一緒に話を聞く。つき合う。そうすると、いろいろツッパッた服装や何かしてたときにもっと直接的に「おまえは今、学校の生徒だから、俺何にも言わないけれども、自分の息子だったら、そんなことしてたら張っ倒しちゃうなあ」というふうな話が直接的に伝わり合うという場をつくるべきだと思うんです。

だから、学校という空間が地域の中から離れたところにあってはならないというふうに僕は思ってますし、そういう意味では児童相談所というものも、離れたところに子どもを呼んだり、学校へ子どもを呼びつけたりということじゃなくて、その地域の人たちと一緒に、もうならなければいけないと思うんです。

時間がなくて申し訳ないんですけど、僕はいま〝生活つづり方〟というものですね、これは、別な形で伝統として解放教育のなかではやられてると思うんですけど、それとですね、戦後すぐにですね、これはアメリカの占領軍の影響で言われたものですから問題だ、



といわれていますけど、僕はかなり日本の今の現状とつながると思っていまして、〝コアカリキュラム運動〟というのがあったんです。ほんのわずかの期間ですぐ潰されてしまいますが、このコアカリキュラムですね、授業がどんなものを教えたらいいかという、先生たちが戦後、まったく今までのものが否定されちゃいましたので、どうしていいかまったくわからなくて、ほんの二年間ぐらいしか、本物の実践はないんですけど、そのときに教師たちが一体何を教えたらいいかということでですね、教育の内容を決めるときには、こういう三項目を決定してやったんです。

地域社会そのものが教科書

ひとつは、授業のカリキュラムを決めるときに第一番目。教育内容の編成は、その地域社会の生活を基盤にしてなされるべきこと。その地域の実態に合わせて、教育の内容は決めるべきだということ。

二番目。その編成の主体は、その土地のすべての人々にあること。教師が教育の内容を決めるということじゃなくて、その地域のすべての人がその教育の内容を作る参加者であるということ。

三番目。計画・立案は調査をもとにした、客観性をもったものであること。という三項目を立てて、カリキュラムが作られます。もう、綿密な地域の調査です。今でいいますとここで大和川がどうかということも調査されるということですが、つまり地域の川、地質、緑がどの程度あって、産業がどんな産業であるか、もうていねいなことまで先生と地域の人たち、あるいは生徒も含めて調査をする。そうして、ここで言いますと「いまや書物としての教科書のかわりに、地域社会の生きた生活が教科書となり、この地域に居住する民衆ひとりひとりが教科書となった。そのためには、地域社会そのものが優れて改善されなければ、これを教科書とする子どもの不幸であり、地域全体の不幸である。学校も、いまや地域改善に対して無関心たりえなくなったと同時に、地域社会の人々も教育に対して無関心たりえない」ということです。

ですから、教育の内容も含めて、地域の人たちが一緒に参加をする。それは、学校の中に地域の人たちが入りこんでくる、地域の中に生徒も先生も一緒に入りこんでくる。そういう作業が今求められ、実際にやらなければ、今の問題ですね。いくら建物を造っても、係の人を増やしても、予算をつけても、解決はしないと思います。

そういう意味で、僕自身もこれから永い子どもたちと一緒の実践が始まると思ってますし、そういう意味で、こちらで今まで積み上げられてきたさまざまの実践を、これからも学ばせて頂こうと思ってます。

ちょっと超過して申し訳ありませんが、以上でおわりたいと思います。

どうも、ありがとうございました。

（了）

あとがき

本冊子は、一九八二年十一月二十七日、二十八日に開催された第二回矢田のまつり（部落解放矢田文化祭）の開会集会におこなわれた記念講演「地域からの教育づくり―親とは何か、学校とは何か」の録音テープを掘りおこし、まとめたものである。

このようなかたちで出版することを心よく承諾され、「まえがき」を寄せていただいた野本三吉さんにまずお礼申しあげたい。

野本さんは、講演の中でこう言っている。「自分がもっとも大事にしているものを売りわたさないで、自分たちがもう一度自分たちの手に取り戻すということが、今一番大事なことかもしれない。どこかにまかせてしまうのではなくて、自分たちがもう一度、自分たちの子どもたち、自分たちの育ててくれた両親のこと、自分たちの

地域のこと、それをもう一度自分たちの手に取り戻すということが、一番忘れられていることじゃないかと思います。」

これは、そのまま現在、矢田の教育運動が直面している問題でもある。

今後、この冊子を学習資料として、父母・教師・保母をはじめ、矢田の教育に関わるすべての人々が、広く活用されるよう期待したい。

なお、本冊子の編集は、矢田同和教育推進協議会編集出版部会があたった。カットには矢田小学校の児童作品を利用させていただいた。記してお礼申しあげる。

最後に、本冊子を読まれた感想・ご意見を矢田同推協事務局までお寄せいただくようお願いします。

（矢田同和教育推進協議会編集出版部会）

著者について

野本三吉（のもとさんきち）

1941年東京に生まれる。横浜国立大学卒業後小学校の教師になるが、5年間でやめ、全国を放浪。さまざまな職を経る。72年から横浜市民生局職員となり寿生活館に勤務。82年5月より横浜市南部児童相談所に移る。

主な著書に『不可視のコミューン』（社会評論社）、『裸足の原始人たち―寿地区の子ども―』（田畑書店1974年）、『寿生活館ノート―職場奪還への遠い道―』（同1977年）、『戦後児童生活史』（協同出版1981年）、『親とは何か―N子への手紙』（筑摩書房1982年）、『風の自叙伝』（新宿書房1982年）などがある。

地域からの教育づくり

発行日　1983年3月1日
著　者　野本三吉
発行所　矢田同和教育推進協議会
〒546 大阪市東住吉区矢田5-8-14
矢田解放会館内　電話(06)697-3311
振替　大阪　3－318623